
マーク・トウェインに見る暴力対愛と笑い

金 谷 良 夫

は じ め に

マーク・トウェインはさまざまな作品のなかで、暴力を執拗に描いている。それは、人間生活において常に拘わりが深いからであり、またそれについて考えるべきだからだとトウェインが捉えたからに違いない。

人間は歴史的な点から見ても、個人的な生活の営みの点から見てもそれぞれの環境のなかで、常に暴力と深い拘わりを持ってきた。トウェインの描く例えば、6世紀・15世紀イギリス、15世紀オーストリア、あるいは19世紀アメリカ社会も例外ではない。ある意味では、時代環境が暴力を生み出すのである。とりわけトウェインの生きた特に19世紀アメリカ——フロンティアから正に暴力が顕著に読みとれる。

しかし、トウェインは暴力を好む人間は一握りのものしかいないと言っている。彼は、代表作『ハックルベリ・フィンの冒険』（以下『ハック・フィン』と略記)においても、「普通の人にはトラブルも危険も好きじゃない。……哀れなものなかで最も哀れなものが暴徒だ。軍隊とは所謂一つの暴徒だ。根っからの勇気ではなく大勢のひとや上官から借りた勇気で戦うんだ」と書いている。数多く人間が何故暴力を行使するのか。人間は強い存在だからなの

か、あるいは弱い存在だからなのか。また、人間は不完全だからなのか。暴力に対して人間に必要なものは愛なのか、笑いなのか。本稿では、トウエインのそうした作品を通して、この問題テーマを考察してみたい。

環境と暴力

『コネティカット・ヤンキー』(1889年)のアーサー王朝、『王子と乞食』(1882年)のチューダー王朝、『外国放浪記』(1889年)のヨーロッパ、あるいは『赤道に沿って——世界一周の旅』(1899年)の世界について、更には「呪われた人類」(1889年)、『地球からの手紙』(1962年)や未完の『不思議なよそ者・原稿』(1916年)における地球全体や聖書の世界において、トウエインは人間性の一面たる暴力を描いている。

『コネティカット・ヤンキー』はハンクが部下に殴打される暴力に始まり、彼がマーリンに刺される暴力に終わるのである。これは、トウエインの作品のなかで最も暴力的色彩の濃い物語である。

『王子と乞食』では、ヘンドンが王子を助けようとするとき、暴徒は「奴め、殺せ！ 奴を殺せ！ 奴を殺せ！」¹⁾と叫ぶ。トウエインはここでもまた暴力的な人間の浅ましきや醜さを描いているのだ。『ハック・フィン』のシェパードスンの男たちによる殺戮の現場に居合わせたハックは、その凄惨な光景を夢にまで見るが、これは、獄中に囚われた王子とヘンドンが、そこで火炙りにされる母親と彼女のもとに駆け寄る子供を目撃したときの場面を連想させる。王子は、「予があゝの瞬間見たものは、予の記憶から決して離れずに記憶にとどまることだろう。そして一日中そのことを考え、夜じゅうその夢を見る、死ぬまでそれが続くであろう」²⁾と言うのである。トウエインは人間の

1) *The Prince and the Pauper*, p. 126.

2) *Ibid.*, p. 283.

醜さや残酷さを物語っているのだ。

チューダー王朝の人間もアメリカ人も人間性の点では何ら変わりはないと、トウェインは主張しているのである。シェパードスン家の人々も王子の前にいる醜い人たちも変わらないということはどういうことなのか。つまるところ人間性は遺伝と環境によって形づくられるものなのである。

『コネティカット・ヤンキー』におけるトウェインの人間性の捉え方は暗いが、ここでわれわれはモンタギュの暴力に関する人間性の遺伝と環境論³⁾を当て嵌めることができる。ハンクはフェイ王妃の酷い人間性を垣間見て次のように言う。

教育——教育が全てだ。教育は人間にとって存在の全てだ。われわれは天性のことを話すが、それはばかっている。天性のようなものはなく、そのように紛らわしい名前と呼んでいるものは、遺伝と教育にすぎない。われわれは自分自身の考えなんて全然持っていないし、意見も持っていないのである。そうしたものは受け継がれ教育されたものである。元来われわれの内にあるもの全ては、従ってわれわれにとり結構名誉であるか不名誉であるが、キャンブリックの針の先で覆い隠せるようなもので、あとは全部何十億年前のアダム貝やバツタや人類が由来するという猿といった長い行進のお陰で受け継がれた原子なのだ。人類は大そう退屈に、これ見よがしに、しかも無益に進化したものなのだ。そして私にとっては、このとぼとぼ歩く悲しい巡礼の旅即ち永遠と永遠との狭間のこの哀れな漂流の旅で考えるのは、純粹で気高い、潔白な生き方を見つけ、慎ましく生き、私の内⁴⁾にあって真に私である一つの極微の原子をとっておくことである。

3) Ashley Montagu, *The Nature of Human Agression*, pp. 3-4.

4) *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, p. 208.

ハンクによれば、人間は遺伝と教育（言い換えれば環境）により決定され、人間の内にあるものは原子でしかないという。それ故人間は「純粹で気高い、潔白な生き方を見つけ、慎ましく生き」るのだというのである。人間は遺伝と教育によって墮落し、暴力的で残忍になってしまったというハンクの否定的な彼の言葉を通して、トウェインは人間性の否定的な部分を批判すると共に、その向上を訴えているのである。

遺伝と環境によってできあがってしまった人間としては、他に円卓の騎士や積年王位を占めて来た人々や領主の配下や、あるいはまだ完成していない子供たちが挙げられる。

ハンクは、暴力を楽しむ円卓の騎士の姿を嫌悪し、その後で王位を占めて来た人間のことを考えて、「誰だって人類が恥ずかしくなる⁵⁾」と言う。

ハンクはまた、アーサー王とのお忍びの旅において領主の館での配下の態度を目の当りにし、嫌悪する。ハンクは言う。

この男も女も、自分たちと同じ階級にある者と領主との間で争いがあれば、その哀れな悪魔の階級全体が主人の側に立って戦うのが当然で、適切で正しく、事の正邪を問うことなどしないと感じているようだ。この男は自分の隣人たちの縛り首を助けようと出て行き、それを一生懸命やったが、彼らに対しては疑い以外何も持たないし、彼らを擁護する証拠など何もないと思っ込んでいる。それでも彼も彼の妻もそれについて恐ろしいものを見ているとは思っていないようだった⁶⁾。

ハンクは人は何故「事の正邪を問う」ことをしないのかと疑問を抱くのである。上流階級の人には卑屈になり、奴隷には高慢な態度を執るそうした人間

5) *Ibid.*, p. 101.

6) *Ibid.*, p. 343.

に対して、彼は言う。

本当に、時々人類全体を縛り首にしてこの茶番を終わらせたいと思う⁷⁾。

ハンクは更に続け、そうした人間と共通するアメリカ南部の奴隷制度にまつわる「プア・ホワイト」の例を引き、人間の墮落や理不尽さを述べる。プア・ホワイトもここでの配下のように、奴隷領主を憎んでいたが、彼らを表面的に立て奴隷制度を支持しようとしたのである。ハンクは表面的な人間、つまり「事の正邪を問う」ことなどしない人を「人間はなんと言っても、心の底では人間なのだ⁸⁾」と普遍的な人間の常を語るのである。

その後ハンクは、子供たちから成る暴徒が子供の一人を縛り首にしようとしている光景を目撃し、「これも人間性のあらわれだ⁹⁾」と言う。これはつまり、子供たちとて大人たちの愚かさや残酷さを模倣しているにすぎないことを意味している。

このようにあらゆる層の否定的な人間を、トウェインはことごとく告発・批判しているのである。トウェインはまた同時に、ハンクの言う人間の内にあって真に自分である「原子」をもちつつ、人間性を向上させるべきであるとも主張しているのである。

遺伝と教育については、『人間とは何か』の「老人」の言葉が大変興味深い。彼は、「人間の気質〔生来の性質〕と教育〔外部からの影響全て〕が人間の行動を決めるし、人間はそうする。そうするより仕方がないし、物事に対して権威なんかないのだ¹⁰⁾」と言う。故に、人間は、訓戒として理想を高く持ち自分を教育して理想の頂点に達するよう生きる。そうなれば、「……人間は

7) *Ibid.*, p. 348.

8) *Ibid.*, p. 343.

9) *Ibid.*, p. 349.

10) *What Is Man ?*, p. 200.

満足するし、それならきっと隣人や社会にも利益をもたらす行為になるから、その行為に最大の喜びを見出すことである¹¹⁾」ということである。この「老人」の人間性の捉え方は、ハンクのそれと相通ずると言えよう。「老人」もハンクもこのように人間性に関して、環境重視の立場を主張している。

「ハドルバーグを腐敗させた男」(1896年)は環境により墮落する人間を描いた短編である。ここからも人間性は環境や教育によって決まるという捉え方が読める。町を腐敗させた男、よそ者ハワード・スティーヴンスンは、清廉潔白といわれるハドルバーグの町の代表者19人の化けの皮を剥ぎ、徹底的に痛めつける。清廉潔白というスローガン掲げる町の環境によって作られた、卑怯で臆病な老人リチャーズ夫妻が言わば悲劇の主人公だ。何故よそ者が善良といわれる町の人々を苦しめる結果となったのか。それは閉鎖的で独断的で虚栄心を持つ町の人から彼が「身に覚えのない酷い侮辱をうけた¹²⁾」からであり、こうした侮辱が心理的暴力となったのである。また、この町には暴力の介在を許す空気があったのである。事実、人間に羽根とタールで塗りつける暴力も存在したのである。

ハドルバーグの町を攻撃するハワードの手紙によると「私は町の人全部、男性も女性も痛めつけようと思った——肉体でもなく財産でもなく虚栄心に対してだ。弱い愚かな人間が最も傷付きやすいところだ。……はあ、あなたがた単純な人たちよ、あらゆるものの中で最も弱いものというのは火の中で試されていない徳である¹³⁾」。時には心理的暴力が物理的暴力を生むが、ここでは心理的暴力が心理的暴力を生んでいる。ある意味では、単なる物理的暴力よりも心理的暴力のほうがはるかに恐ろしいものになる。それは心理的暴力が致命的な物理的暴力を導くからであり、また人間は心理的暴力によって計り

11) *Ibid.*, p. 173.

12) *The Complete Short Stories of Mark Twain.*, p. 350.

13) *Ibid.*, p. 380.

知れない精神的打撃を受け得るからである。この短編の場合がその一例である。

さて、教育について述べるリチャーズ夫人の言葉によると、「正直であれとは永遠の教育，教育，そして教育です。——正に揺籃から，それは，ありとあらゆる誘惑に対して正直に守られたのですから，作られた正直で，誘惑があれば水のように脆いのですよ，今晚憂き目にあっているのですから¹⁴⁾」と言う。彼女は自分を含め，町全体の人々の驕り，あるいは薄っぺらな人間性が教育（環境）によって作られてしまった悲劇を物語っているのである。すなわち，作者トウェインは表面的には善良で正直に見えても，実は心の内側では嘘をついたり，不誠実であったりする人間がいかに多いかを，善良だが弱いリチャーズ夫妻を通して批判しているのだ。彼は悪人ではなく善良な彼らを批判の的にしたからこそ，彼の批判は一層痛烈になっているのである。

トウェインの人間性批判は終生続く。勿論それはアメリカに対してだけではない。同じく晩年の作品『赤道に沿って——世界一周の旅』で彼は，インド史に登場する絞殺強盗団に言及し，人間性の一面を表す暴力を物語っている。

殺す喜び！ 殺しを見る喜び——これらは人類一般の特色である。われわれ白人は単に絞殺強盗団のなり変わりであり，絞殺強盗団は文明のちょっとした抑圧に苦悩しているのだ。¹⁵⁾

文明という環境によって，人間は知らず知らずのうちに教育されている。人間は文明の抑圧という暴力も受けていると言ってもよい。人間が人間を殺して喜び，またそれを見て喜ぶということも，環境のなせる業と言えるだろう。

14) *Ibid.*, p. 358.

15) *Following the Equator : A Journey around the World*, p. 437.

さらに、トウェインは古代ローマの闘技場に見られる殺戮、公の場におけるキリスト教徒の火炙り、スペインやフランスにおける血腥い悲惨な闘争——こうしたものを人間は楽しんでいるのだ、と述べて人間性の残酷さや醜さを批判するのである。

「呪われた人類」というエッセイにおいても、トウェインは「あらゆる動物のなかで、人間が唯一残酷な動物である。人間は楽しむために残酷なことをして痛み付ける唯一の動物である¹⁶⁾」と述べ、人間性の凶悪さを説いている。

トウェインはまた『地球からの手紙』において、人間の残酷性や人種・民族の偏見がもたらす暴力を描く。彼はサタンの口を借りて、「あらゆる時代における人間の歴史は血に染まり、憎悪で燃え、残虐行為に汚れて¹⁷⁾」おり、「あらゆる国家は他の全ての国家を見下している。あらゆる白人の国家は有色人種を軽蔑し、たとえどんな肌の色であろうとも彼らを可能な限り圧迫している¹⁸⁾」と述べている。また、トウェインはアメリカの歴史に残るようなインディアンの残虐行為を書く。「1862年、ミネソタのインディアンは合衆国政府からかなり不当な扱いを受け、裏切られて来たために、白人開拓者に反抗して立ち上がり、彼らを皆殺しにした。年齢や性別に関係無く手当たり次第皆殺しにしたのだ。この一件を考えてみなさい¹⁹⁾」とトウェインは促す。つまり、この作品では、環境によって歪んだ白人と環境によって虐げられたインディアンを通じた人間全体の暴力性が批判されているのである。この作品では人間の残虐行為は神の仕業の真似であり、それは神の御心に沿ったものとして捉えられており、作者はむしろ人間に対して同情をもって哀れんでいるとも言える。

トウェインの晩年の未完の作品『不思議なよそ者・原稿』にも、人間の暴

16) Bernard DeVoto ed., *Letters from the Earth*, p. 179.

17) *Ibid.*, p. 52.

18) *Ibid.*, p. 16.

19) *Ibid.*, p. 53.

力性批判および人間に対する同情が色濃く流れている。トウェインはここで、文明と呼ばれる営みにおいて、人間は宗教や戦争を巧みに合理化したり、利用してきたと批判している。聖書に代表されるキリスト教文明とそれがもたらした戦争が徹底的に糾弾されている。キリスト教文明自体が暴力として捉えられているのである。

トウェインはその作品の第一部「若きサタンの物語」において、サタンの言葉を通して、キリスト教文明や戦争を批判・糾弾し、一連の暴力を例として並べている。そしてそれら暴力行為とは、「人類の進歩の歴史²⁰⁾」なのだという。カインは棍棒でアベルを殺し、ヘブライ人は槍や剣で殺人を行い、ギリシャ人とローマ人は防御の鎧を使い、軍を組織し統帥権をふるい、キリスト教は銃や火薬といった有効な武器を開発し、効果的に殺戮を行った。そして、「あらゆる人間は、もし『キリスト教文明』がなかったとしたら戦争はとるに足りないものでしかなかった、と嘆くに違いないのだ²¹⁾」と続ける。このようにトウェインは、人間による殺戮、戦争、そして文明をことごとく批判・糾弾するだけでなく、それぞれの時代のそれぞれの環境で、暴力を行使してきた人間の愚かさを嘆き悲しみ、そのような宿命を持つ、不完全な人間を哀れんでいるのである。

さて、トウェインの人間性に関する見方は、『人間とは何か』の「老人」が言うようにむしろ悪であり、それはモンタギュの論と反対になろうが、遺伝・環境に関するトウェインの見方はモンタギュのそれと共通している。両者は共に教育や環境を重視する。彼らは共に人間は教育・環境によって善になるということを主張しているのである。では、もう少し彼らの共通点を見る必要があるだろう。

一体、トウェインは人類全体が暴力的だと言っているのだろうか。確かに

20) *Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts*, p. 134.

21) *Ibid.*, p. 136.

あらゆる人間は暴力的になり得る。『不思議なよそ者・原稿』の一節を見てみよう。

人類は羊で構成されている。少数の人に支配されており，大多数の人に支配されることは希だ，否，決してない。感情も信念も抑えて，最も大きな雑音を立てる一握りの人について行く。時には，そういう騒がしい人が正しいが，時には正しくない。しかし，そんなことは問題じゃない。大衆はそれについて行くからである。人類の大多数は，たとえ未開人でも文明人でも，心の底は優しく，人を苦しめることには怯むんだ。が，暴力的で冷酷な少数派を前にすると，思い切って自分を主張するなんてことはしない。考えてみなさい！ 一人の優しい心の持主が別の人を密かに見張って，意に反する非道な行為に，忠誠を尽くして手助けするように気を配るんだ。……戦争を扇動する側に——正当な人は決していなかったし，卑劣なことをしない立派な人など全くいなかった。……いつもの通り——大声を張り上げる一握りの人——が戦争を呼びかける。……そうして全国民——宗教界も全てが全て——戦いの喊声をあげ，叫び過ぎて声がかれる。そして敢えて口を開くような誠実な人が群がってやじられ襲われるんだ。間もなくそうした人々の口は閉ざされてしまう。次に政治家がけちな嘘をでっちあげ，攻撃された国にその罪を着せる。そして国民誰もがその良心を宥めるような虚偽を喜んで受け容れ，熱心に学ぶが，反論なんかは全然検討しない。こうして誰もが戦争は正当なんだと確信し，このグロテスクな自己欺瞞²²⁾の作用を通して，より一層の安眠を求めて神に感謝するのである。

この引用は一部の人間の暴力性と人間一般の善性を示している。そして，これはトウェインのエッセイ「戦争の祈り」（1923年）を連想させる。「最も大

22) *Ibid.*, pp. 154-56.

きな雑音を立てる一握りの人」とは取りも直さず暴徒の扇動者であり、またあるいは政治家である。そして「大衆」が暴徒や政治家になるのである。なお、直接戦争に参加しない政治家が戦争を始めるのである。トウェインはこうした人間を痛烈に批判しているのだ。だが、彼は大部分の人間は「優しい心の持主」だと主張している。それでは何故大部分の優しい人間が一部の人間に圧倒されてしまうのか。それは、トウェインによると、人間は臆病であるため、自分を正直に表現できないからだという。いずれにしても、彼は「暴力的で冷酷な少数派」の人間性は「長く受け継がれてきた偏見やばかげた教育²³⁾」によって歪められていることを強調すると同時に、大多数の優しい人間の弱さが少数派に加担していくという現象を述べているのである。

この点もモンタギューの言う「暴力的な人もいる——だが、『一部』を『全部』と混同しないようにしよう²⁴⁾」と共通する。さらに、「戦争は概して大きな権力の座にある少数の個人によって、……判断が道徳的に完全に正しくなくとも、そういう見せかけでなされる²⁵⁾」という見解も、サタンの表現を通したトウェインのそれと同様であるということが出来る。

トウェインは何故それほどまでに人間の暴力や残酷な人間性を執拗に描いたのか。それは人間を痛めつけるためというよりも、むしろ人間を擁護するためからなのである。それ故、彼は人間を攻撃するキャラクターとして人間ではないサタンを用いたのである。

人間は臆病であるため他の人間と一緒にないと不安を覚え、たとえ悪いと気付いても自分の意志を曲げて行動してしまう。人間は全く矛盾する弱い存在であるから、情けをかける必要があるのだと彼は暗示する。

23) *Ibid.*, p. 154.

24) Ashley Montagu, *op. cit.*, p. 106.

25) *Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts*, p. 271.

暴力を巡る愛と笑い

マーク・トウェインは生涯人間性を追究して止まなかった。彼はニーチェやイプセンなどの哲学者の本は読む必要もなかったし、読みたい気持ちもなかったと言ひ、次のように言う。「全て人間自身が全人類であり、何一つ欠けるものはない。私も何一つ欠けるところのない全人類だ。私は自分自身のなかでこれまでずっと熱心にしかも強い興味をもって人類を研究してきた。人間は皆なんと臆病なのか！……人類は臆病な種族なのだ。そして私自身もその人類の行進をしているばかりでなく、旗標まで掲げているのである²⁶⁾」。これは彼の特徴を如実に物語る。すなわち、彼は自分だけいい恰好をして、他の人間を嘲笑ったり、軽蔑したりするのではない。彼自身も弱い人類の代表であるというのだ。ここに彼の謙虚さおよび人間に対する深い愛が感じられる。

例えば、ハックの人間性はこうした愛に由来する。ハックがウォルター・スコット号の悪党三人組を助けようとするのも、またジムに対して、歴史上の王様は大方悪党であることに言及し、「王様」と「公爵」を斟酌してやらなければいけないと言うのも、人間に対する愛からである。あるいはまた、その二人の愚かさや下劣さに対し、「誰だって人類が恥ずかしくなった」というのも、そして彼らがパイクスヴィルの連中に暴力を加えられているときに「哀れで、惨めな彼ら悪党が気の毒になる²⁷⁾」と言うのも彼の暖かい人間性からくるものである。さらに、ハックが意を決してメアリ・ジェイン一家を救うのも、また彼がミス・ワトスンのことと悩むのも、そして地獄行きを決心してジムを幫助しようとするのも全てハックの人間性を通した作者トウェインの人間擁護の愛に他ならない。ジムに対するハックの決断についてトウェイン

26) Bernard DeVoto ed., *Mark Twain in Eruption*, preface.

27) *Adventures of Huckleberry Finn*, p. 290.

は事実、「健全な心情と歪んだ良心が真向から衝突し、良心の方が敗北する²⁸⁾」と言ったが、「健全な心情」とは言い換えれば人間愛である。トウェインはハックの愛を強調することによって、嘆かわしい人間の姿に対し救いを見出したとすることができる。

そして『ハック・フィン』で、トウェインが冷酷無情なシャアバーン大佐を登場させたのも、見方を換えれば、人間に対する愛からだと言えなくもない。何故なら、トウェインは優しい人間ハックにシャアバーン大佐のような人間を超越した役割を演じさせていないからである。作者はシャアバーン大佐にハックでは決して表すことのできない力を発揮させている。その力とは例えば殺人や演説だ。シャアバーン大佐のボグズ射殺は無情であり、彼の演説には暴徒に対する猛々しい軽蔑や攻撃がある。それはハックの理や人間性を裏切るものである。彼は優しい少年である。トウェインはそういうハックに、人間に対する明るいヴィジョンを抱かせたかったのである。

ハックがトウェインの考えを代弁するように、シャアバーン大佐やサタン、あるいはその中間的存在であるハンクも同様にトウェインの考えを代弁していると考えられる。ハックの考え方はハンクに受け継がれており、彼ら二人には人間性の面で共通する愛がある。

『コネティカット・ヤンキー』において、自分の伴侶サンディが豚を崇め、それと戯れる行為を見て、ハンクは「人類が恥ずかしかった²⁹⁾」と言うが、その言葉も、また王位を占めてきた人たちに対して「誰だって人類が恥ずかしくなる」というのも、人間性批判であると同時に、ハンク自身も人間であることに対する仲間意識即ち人間愛から出ている。

確かにトウェインの人間性批判は永続的に続き、彼の晩年のそれは異常とさえ言えるかも知れない。にもかかわらず、彼の批判の根底には人間愛が読

28) Walter Blair, *Mark Twain and Huck Finn*, p. 134.

29) *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, p. 232.

める。晩年の1899年、トウェインは、親友のウィリアム・ディーン・ハウエルズに宛てた手紙のなかで、人間は悪意に満ちた神によって弄ばれた愚かな存在であり、その人間の行為は卑劣で残酷を極める、と述べているが、それでも人間に絶望はしないと続けている。³⁰⁾トウェインはまたしても一部の暴力的な、弱い、愚かな人間を批判すると同時に擁護しているのである。また、彼は次のようにも言う。

警棒と連発拳銃をもった警官を廃止し、『青春』と『愛』で完全に武装した詩人の一隊をおこ³¹⁾う。

これは正に人間を救えるのは、暴力ではなく愛だということを物語っているのである。

さて、マーク・トウェインは愛の他にも人間を救えるものがあると言っているのだろうか。トウェインは「凶^{ヴァオレント}暴な気質を持っていたが、ユーモアのセンスがあったので絞首刑から救われた。彼は同じようにユーモアが自己崩壊する人類を救えると信じたのだ。若い頃、トウェインは何度も暴力を揮う気になっていた。一度彼は反決闘法を破ったため起訴されるのを避けてネヴァダを去らなければならなかった。だが、その賢い男は思慮分別のある男性へと成長し、徐々に平和をもたらす有り難い忍耐というものを学んだ。『もし万一私に今挑戦してくるような男がいれば、その男の所へ行き、親切に、しかも咎め立てをしないで、彼の手を取り静かなひっそりとした場所へ連れて行って殺してしま³²⁾うのだが』と年とった彼は罪もなさげに言った」ということである。無論、トウェインはユーモアを交えてそう言ったのであり、ここには

30) Henry Nash Smith and William Gibson eds., *Mark Twain Howells Letters*, pp. 689-92.

31) *A Pen Warmed-Up in Hell: Mark Twain in Protest*, p. 12.

32) Alex Ayres, *The Wit and Wisdom of Mark Twain*, p. 239.

ユーモアがあり、またユーモアが解せる人間が人類を救えるとの含蓄があるのである。この種のユーモアは、トウェインのユーモアに詳しいジェイムズ・コックスの言と共通する。それは、「トウェインのユーモアとは、フロンティアのほとんどの文芸家のユーモアと同様、フロンティアの肉体的暴力に匹敵するような一種の『文学的』暴力であった³³⁾」というものである。

アメリカには、今でもトール・テイル的笑いがあるが、それは元々フロンティアという厳しい自然環境における生活の不安、疲労、憂鬱、死、暴力、恐怖、絶望からの、また厳格な宗教的空気からの解放を目的として生じたと言われている。ケニース・リンは、「気まぐれで始まり冒瀆で終るトール・トーク（トール・テイル）はフロンティアの人間には必要であった。何故なら、それはその荒³⁴⁾野という相手の得意の手で逆にやっつけ、恐怖を生みの喜びに変え、無力さを爽快な力感に変える一つの方法であった。フロンティアの人間は、途轍もないほらをもって、一つの抗しがたい宇宙に大胆に立ち向かったのだ」と述べる。このようにフロンティアの人たちは、極めがたいウィルダ³⁴⁾ーネスを卑小化するというよりも逆にその現実を誇大化すること、とりわけ笑いによって諸々の現実の問題から解放されたいと願ったのである。

トウェインの笑いは、このトール・テイルの伝統を引き、話芸や地方語を盛り込むことにより、武器として確立されたものである。厳しい現実を和らげ、現地の特色を内包したこの笑いは取りも直さず人を救うものである。人間には常に笑いが不可欠であり、生活状況がきびしければなおのこと笑いは必要となってくる。精神的余裕のないところに笑いの生まれる余地はないだろうが、物事に余裕をもって当たれば笑いは生まれる。トウェインは、その余裕を持てば、自然や人間社会の厳しさ（暴力的環境）のなかにあっても、人間は笑いを見出せると強調したのである。換言すれば、彼は暴力から人間

33) *The Encyclopedia Americana*, Vol. 27, p. 291-a.

34) Kenneth Lynn, *Mark Twain and Southwestern Humor*, pp. 27-8.

を救う一つの手段としての笑いを強調したのである。勿論それは悪意の笑いではない。トウェインは「若きサタンの物語」のサタンの口を通してそうした笑いについて次のように述べる。

人類には欠乏しているものが多いが、ただ一つ疑いなく有効な武器——笑いがある。権力、金、信仰、嘆願、迫害——こういうものは巨大な虚偽をもたらし得る。それを1世紀、1世紀と少しは押し動かしたり、多少は弱めることができる。だが、『笑い』だけがただの一吹きで、虚偽を粉みじんに吹き飛ばすことができる。『笑い』を攻撃できるものは何もない。人間はいつも他の武器を用いて騒ぎ立てたり戦ったりしているんだ。人間は笑いの武器なんか使うことがあるのかね。いや放っておいて錆びらかしておく。人間として一体全体それを使うことなんかあるのかね。いや——人間にはそんなセンスも勇氣もないのだ。³⁵⁾

トウェインは、人間にはこのように唯一有効な武器としての笑いがあるにもかかわらず、それを十分に利用していないことを嘆くと共に、人間は「他の武器」を用いて戦うのは止め「笑いの武器」を活用し平和に生きるべきだということを強調しているのである。その「他の武器」とは暴力のことと言え、いかなる武器も社会を変えることはできないということが暗示されている。笑いは暴力を粉碎し、人を救うことができるのである。トウェインの意味する笑いは、人間の嘘偽りを暴露し、社会の一握りの暴力的な権威に挑む「唯一有効な武器」なのである。

暴力についてはトウェインと論を異にするが、笑いについて、コンラート・ローレンツも言っている。彼は、「いっしょに笑うことができるということは、真の友情をつくりだすための前提であるばかりでなく、ほとんど友情の

35) *Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts*, pp. 165-66.

第一歩を踏み出したということなのだ。笑いは……高尚な意味で人間固有のものである。……笑っている人間が発砲することはけっしてない³⁶⁾」と述べ、笑いが友情（愛）をもたらし、暴力を拒絶すると説いている。笑いが人間固有のものだということは、アリストテレスの「動物部分論」³⁷⁾に由来する。

聖書の箴言に、「笑う時にさえ心に悲しみがある」という言葉があるが、トウェインの笑いについてもそれは言える。これは、デ・ヴォートが「初めてアメリカ文学に悲劇的な笑いをもたらすのだ」³⁸⁾と評していることとも共通する。こういう場合トウェインは人間を厭う気持ちを笑い飛ばそうとしたのだ。トウェインの笑いを悲劇的だと見れば、それは彼の内心の焦慮、憤り、あるいは悲しみの裏返しにすぎないかも知れない。しかし、来世や神の世界のような完全無欠な所には笑いの入る余地はないであろうが、不完全な人間世界には笑いが必要なのである。トウェインは笑いに人間性の善を見出し、そこに最後まで縋っていたとすることができる。

アメリカには悲劇を生む暴力が顕著だ。社会や個人にとって最大の敵である暴力は至るところに存在する。これは、ルネ・ジラルールが述べるように「暴力に終止符を打つためには、暴力なくしてはすまない」³⁹⁾からなのか、それとも「本質的な暴力が単に歴史の領域においても、われわれの上に劇的に回帰する」⁴⁰⁾からなのか、いずれにしても社会形成あるいは文化形成の過程を考える場合暴力が必ず登場する。

また、フロイトが述べるように、「いまや人類は、自然力の征服の点で大きな進歩をとげ、自然力の助けを借りればたがいに最後の一人まで殺し合うことが容易である。現代人の焦躁・不幸・不安のかなりの部分は、われわれが

36) コンラート・ローレンツ、『攻撃』, pp. 374-75.

37) 『アリストテレス全集 8』, pp. 354-55.

38) Bernard DeVote, *Mark Twain's America*, p. 268.

39) ルネ・ジラルール、『暴力と聖なるもの』, p. 42.

40) *Ibid.*, p. 520.

このことを知っていることから生じている⁴¹⁾」のである。これ故にこそ、われわれは暴力の根絶に更に努力すべきなのである。

アメリカには確かに、暴力の伝統が読み取れるが一方では非暴力主義の伝統もある。ペンシルヴァニアの創建者ウィリアム・ペン、メキシコ戦争を批判し「市民としての反抗」(1849年)を著し、奴隷解放を願ったヘンリー・ソーロウ、奴隷制度廃止論者のウィリアム・ロイド・ギャリスン、黒人運動指導者のマーティン・ルーサー・キング二世などがいる。非暴力を訴えたこうした人々によって、トルストイやガンジーでさえ影響を受けたという。

そして、文学を通して人間の暴力をことごとく批判し、物事を頭ではなくむしろ心で捉え、愛と笑いを訴えたマーク・トウェインがいるのである。

テキスト

Adventures of Huckleberry Finn. Eds. Walter Blaire and Victor Fischer. Berkeley: University of California Press, 1985.

The Adventures of Tom Sawyer Tom Sawyer Abroad Tom Sawyer, Detective. Eds. John C. Gerber and Paul Baender. Berkeley: University of California Press, 1980.

The Autobiography of Mark Twain. Ed. Charles Neider. New York: Harper and Row Publishers, 1975.

The Complete Essays of Mark Twain. Ed. Charles Neider. Garden City: Doubleday and Company, 1963.

The Complete Short Stories of Mark Twain. Ed. Charles Neider. Garden City: Doubleday and Company, 1961.

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court. Ed. Bernard L. Stein. Berkeley: University of California Press, 1979.

Following the Equator: A Journey Around the World. Hartford: The Amer-

41) ジクムンド・フロイト、『フロイト著作集3』, p. 496.

- ican Publishing Company, 1897.
- Letters from the Earth*. Ed. Bernard DeVoto. New York : Harper and Row, Publishers, 1974.
- Life on the Mississippi*. New York : Bantam Books, 1945.
- Mark Twain-Howells Letters*. Eds. Henry Nash Smith and William M. Gibson. 2vols. Cambridge : Harvard University Press, 1960.
- Mark Twain in Eruption : Hitherto Unpublished Pages about Men and Events*. Ed. Bernard DeVoto. New York : Harper and Brothers Publishers, 1940.
- Mark Twain on the Damned Human Race*. Ed. Janet Smith. New York : Hill and Wang, 1962.
- Mark Twain's Autobiography*. 2vols. New York : Harper and Brothers, 1924.
- Mark Twain's Letters*. 2vols. New York : Harper and Brothers Publishers, 1917.
- Mark Twain's Notebook*. Ed. Albet Bigelow Paine. New York : Cooper Square Publishers, 1972.
- Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts*. Ed. William M. Gibson. Berkeley : University of California Press, 1969.
- A Pen Warmed-up in Hell : Mark Twain in Protest*. Ed. Frederick Anderson. New York : Harper and Row, Publishers, 1972.
- The Prince and the Pauper*. Eds. Victor Fischer and Lin Salamo. Berkeley : University of California Press, 1979.
- A Tramp Abroad*. Ed. Charles Neider. New York : Harper and Row Publishers, 1977.
- What Is Man?*. Ed. Paul Baender. Berkeley : University of California Press, 1973.

参考文献

- Allen, Gerald. "Mark Twain's Yankee." *The New England Quarterly*, (December, 1966), 435-46.
- Altick, Richard D. "Mark Twain's Despair : An Explanation in Terms of His Human." *The South Atlantic Quarterly*, 34 (October, 1935), 359-67.
- Anderson, Frederick. *Mark Twain : The Critical Heritage*. London : Routledge

- and Kegan Paul, 1971.
- アリストテレス 島崎三郎訳「動物部分論」『アリストテレス全集 8』岩波書店, 1969.
- Auden, W. H. "Huck and Oliver." *Mark Twain: A Collection of Critical Essays*. Henry Nash Smith, ed. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1963.
- Ayres, Alex. *The Wit and Wisdom of Mark Twain*. New York: Harper and Row Publishers, 1987.
- Baetzhold, Howard G. "The Course of Composition of *A Connecticut Yankee*: A Reinterpretation." *American Literature*, 33 (May, 1961), 195-214.
- Bellamy, Gladys. *Mark Twain as a Literary Artist*. Norman: Oklahoma University Press, 1950.
- Blair, Walter. *Mark Twain and Huck Finn*. 1960. Berkeley: University of California Press, 1973.
- . *Native American Humor*. San Francisco: Chandler Publishing Company, 1960.
- Bradley, Sculley, Richmond Croom Beatty, E. Hudsonlong, and Thomas Cooley, eds. *Adventures of Huckleberry Finn: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. 1961. New York: W. W. Norton and Compnay, 1977.
- Brooks, Van Wyck. *The Ordeal of Mark Twain*. 1933. New York: AMS Press, 1977.
- Brown, Richard Maxwell. *Strain of Violence: Historical Studies of America and Vigilantism*. New York: Oxford University Press, 1975.
- Covici, Pascal Jr. *Mark Twain's Humor*. Dallas: Southern Methodist University Press, 1962.
- Cox, James M. *Mark Twain: The Fate of Humor*. Princeton: Princeton University Press, 1966.
- DeVoto, Bernard. *Mark Twain at Work*. Cambridge: Harvard University Press, 1942.
- . *Mark Twain's America*. 1932. Westport: Greenwood Press, 1960.
- Fiedler, Leslie. *Love and Death*. Now York: Criterion Books, 1960.
- フロイト, シグムント 高橋義孝他訳「文化への不満」『フロイト著作集 3』人文

- 書院, 1969.
- フロム, エーリッヒ 佐田啓一他訳『破壊——人間性の解剖』2巻, 紀伊國屋書店, 1975.
- Gerber, John C. *Mark Twain*. Boston: Twayne Publishers, 1988.
- Gibson, William M. *The Art of Mark Twain*. New York: Oxford University Press, 1976.
- ジラール, ルネ 古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局, 1982.
- Graham, Hugh Davis. *Violence: The Crisis of American Confidence*. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1971.
- Guttmann, Allen. "Mark Twain's Connecticut Yankee: Affirmation of the Vernacular Tradition," *The New England Quarterly*, 33 (June, 1960), 232-36.
- 今村仁司『暴力のオントロジー』勁草書房, 1986.
- Jonson, James L. *Mark Twain and The Limits of Power: Emerson's God in Ruins*. Knoxville: University of Tennessee Press, 1982.
- 亀井俊介『荒野のアメリカ』南雲堂, 1987.
- .『わが古典アメリカ文学』南雲堂, 1985.
- Leary, Lewis. *Mark Twain*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1960.
- Long, Hudson E. and J. R. LeMaster. *The New Mark Twain Handbook*. New York: Garland Publishing Inc., 1985.
- Lynn, Kenneth. "Violence in American Literature and Folklore." *Violence in America: Historical and Comparative Perspectives*. Hugh Davis Graham, ed. Beverly Hills: Sage Publications, 1979.
- . *Mark Twain and Southwestern Humor*. 1959. Westport: Greenwood Press, 1976.
- Montagu, Ashley. *The Nature of Human Aggression*. New York: Oxford University Press, 1976.
- . *On Human Being*. New York: Hawthorne Books, 1966.
- Moyer, K. E. *Violence and Aggression: A Physiological Perspectives*. New York: Paragon House Publishers, 1987.
- 中野好夫『マーク・トウェインの戦争批判——私の憲法勉強』筑摩書房, 1984.
- 西川正身『アメリカ文学覚え書』研究社, 1977.
- 織田正吉『笑いとユーモア』筑摩書房, 1986.

- Paine, Albert B. *Mark Twain, a Biography*. New York : Harper and Brothers Publishers, 1912.
- Panagakos, William C. "The Violence of Mark Twain." New York : A Publications of English Studies Collections, 1977.
- Parsons, Coleman O. "The Devil and Samuel Clemens," *Virginia Quarterly Review*, 23 (Autumn, 1947), 582-606.
- Pinkney, Alphonso. *The American Way of Violence*. New York : Random House, 1972.
- Robinson, Forrest G. *In Bad Faith : The Dynamics of Deception in Mark Twain's America*. Cambridge : Harvard University Press, 1986.
- ローレンツ, コンラート 日高敏隆他訳『攻撃——悪の自然誌』みすず書房, 1985.
- Rourke, Constance. *American Humor : A Study of National Character*. New York : Doubleday and Company, 1931.
- 猿谷要『世界の戦争8』講談社, 1985.
- Schlesinger, Arthur M. Jr. *The Crisis of Confidence : Ideas, Power and Violence in America*. Boston : Houghton Muffin Company, 1975.
- Smith, Henry Nash. *Mark Twain : The Development of a Writer*. New York : Atheneum, 1974.
- . *Mark Twain's Fable of Progress : Political and Economic Ideas in "A Connecticut Yankee."* New Brunswick : Rutgers University Press, 1964.
- Storr, Anthony. *Human Agression*. New York : Atheneum, 1968.
- トゥルニエ, ポール 山口實訳『暴力と人間』ヨルダン社, 1980.
- Turner, Frederick Jackson. *The Frontier in American History*. New York : Holt, Rinehart and Winston, 1963.
- 渡辺利雄「アメリカの群像——ベンジャミン・フランクリンとマーク・トウェイン」亀井俊介編『アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ』日本経済新聞社, 1984.
- . 「トウェインを読む」大橋吉之輔編『アメリカ文学読本』有斐閣, 1982.
- . 『19世紀アメリカ小説の展開：リアリズムから自然主義へ』朱牟田夏雄編『講座 英米文学史 第9巻 小説II』大修館書店, 1984.